



Emanuel A. Schegloff, Gail Jefferson and Harvey Sacks : The Preference for Self-correction in the Organization of Repair in Conversation

Language, Vol.53, No.2, pp.361-382 (June 1977)

『Language』という言語研究の雑誌に掲載された会話分析の有名論文が2本ある。SSJ1974 (Sacks, Schegloff, Jefferson, 1974)¹⁾ と SJS1977 (Schegloff, Jefferson, Sacks, 1977)²⁾ である。本稿では SJS1977 を説明するつもりだが、前提知識としてまず、SSJ1974 について解説しておこう。

人文社会科学の研究には明るくなくても、「ターンテイキング」ということばを聞いたことがある人は多いのではないだろうか。SSJ1974 は会話における順番交替 (ターンテイキング) に関する論文で、言語学や会話分析といった人文科学系研究領域のみならず、ロボットと人を会話させる、人間の会話を理解してエージェントが支援する方法を探るといった HRI (Human Robot Interaction), HAI (Human Agent Interaction) の研究領域でも非常に有名である。その被引用数からみても SSJ1974 の怪物レベルの凄さは説明するまでもないが、端的に言うと SSJ1974 は人間の他愛もない会話において、「次に誰が話すのか」という問題は、順番 (ターン) の組み立てと順番の割り当てにかかわる構成部分、そしてそれらを取り巻く規則群によって記述可能であると説いた。この記述の簡潔さから、SSJ1974 発表以降、多くの工学者は人間の会話理解の研究に踏み切った。しかしながら、工学者が SSJ1974 の本質を正確に解釈し、デザインしたロボットというのはまだ世の中に出てきていない。また、深層学習の技術に対する期待感に根付いた昨今の第三次 AI ブームにおいては、ビッグデータにはほど遠い一つひと

つの会話事例にマイクロに対峙し、ルールベースの記述を彷彿とさせる SSJ1974 の仕事はもはや忘れ去られたように見える。工学者によってたびたび噛み砕かれ味わい尽くされてきた SSJ1974 は、もはや再度注目されることはないのだろうか。

SSJ1974 発表から3年後、このチームが執筆したもう1本の論文が『Language』に掲載されている。SJS1977 である。SJS1977 は、SSJ1974 に比べると工学者からの注目をそれほど浴びてこなかった。しかしながら近年、心理言語学をベースとするマックスプランク心理言語学研究所のチームなどは SJS1977 の論文で扱われる問題をさまざまな側面から解釈し、心理実験や大規模調査に利用している。SJS1977 は会話における修復 (リペア) に関する論文である。端的に言うと SJS1977 は対話・会話における自分の理解と相手の理解の問題を扱った論文で、会話のエンジンとなる自分と相手の心内に描かれる情報の一致度を探り合う行動について詳細に議論したものである。

修復と一口に言うと、「何かを直す」というイメージが湧いてくるかもしれない。ここで修復が試みられるのは、自分と相手が織りなす会話の軌道である。SJS1977 は冒頭で修復と訂正はまったく異なる概念であることを説いている。修復はいまだ一見してトラブルが生じているようには見えない場面においても開始される。たとえば、最近始まったドラマの話をしようと話し始めるが、肝心のタイトルが思い出せない。そんなとき、話し手はいったんそれまでの

やりとりを中断し、「あの一、あれなんだっけ。今期の月9のフジテレビのドラマ……」と相手に小さく問いかける。そうすると相手はタイトルを知っていれば「あ、SUITSね。織田裕二のやつ」と答えてくれるだろう。ドラマの評判や内容について言及したくて語り始めたのに、タイトルが思い出せずに出鼻をくじかれた話し手は、相手からの助け舟をもらい、「そうそう、それね。あれさあ、結構ネットで評判いいんだよね」などと自分が話したかった本題に復帰することができる。この「あの一、あれなんだっけ……」から始まるドラマのタイトルをめぐるやりとりの区間をSJS1977は「修復の区域(repair segment)」と呼ぶ。そして、「あの一」が発話される前までは、聞き手は話し手がトラブルを抱えていることを夢にも思っていなかったため、この一連のやりとりはトラブルが生じているように見えない場面で話し手自身によって開始された修復と理解することができる。これを「自己開始の修復(self-initiated repair)」と呼ぶ。ここで、元々自分と相手が織りなすはずだった会話の軌道はいったん中断され、修復の区域が挟み込まれる。このことにより、自分と相手との情報量が均一になり、この後の会話に不具合が生じる可能性もきわめて少なくなり、会話を進めていくことができる。

自己開始の修復のほかに、「他者開始の修復(other-initiated repair)」というものもある。他者開始の修復はその名の通り、他者すなわち聞き手によって開始される修復のことである。上の月9ドラマを使って解説してみよう。話し手が「あの織田裕二のSUITSってドラマ。あれ、結構ネットで評判いいんだよね」と唐突に話し始める。聞き手は何のことやらさっぱり分からない場合、「え？」と聞き返すだろう。これが他者開始の修復である。「え？」は「無限定の質問」と呼ばれることがある(西阪, 2010:179)。「え？」が指していることが話し手にとって明確ではない。つまり、ドラマの名前を言い直し

てほしいのか、ネットでの評判がいいか悪いかを言い直してほしいのか、話し手の発話全体が聞こえなかったので言い直してほしいのか、何も限定されていない。聞き手が発話の最初の部分の人物名だけが聞き取れなかった場合、「誰？」と聞き返すだろう。これも他者開始の修復である。これは「カテゴリーの限定を伴う質問」と呼ばれることがある(西阪, 2010:181)。ほかにも、「誰のドラマ?」「織田裕二の何?」といったように、相手の発話の一部を繰り返して、質問語(「誰」、「何」等)を追加するやり方もある。これも他者開始の修復である。これは「位置の限定を伴う質問」と呼ばれることがある(西阪, 2010:183)。位置とは順番内のどこを聞き返されるかという意味である。

「え?」「誰?」「誰のドラマ?」を並べて置くと、聞き手が抱えてしまったトラブルがより限定されていくのが分かる。無限定から何かしらの限定を伴わせることによって、自分と相手の情報の一致度がどこまで達成されているのかを聞き手は話し手に示しながら質問しているのである。すなわち、聞き手は何もしていない他者ではなく、自分と相手が紡ぎ出す会話をより効率良く円滑に進めるために、自分の心内の状態を相手に詳らかにしながら発話を繰り返しているのである。

SJS1977が主張した最も重要な指摘は、タイトルにもあるように「自己修復が優先される」ということである。つまり、話し手が自らトラブルもしくはこれからトラブルになり得ること(例:タイトルが明言できないこと)を予期し、自分で会話の流れをせき止め、修復することが穏便策なのだ。話し手が聞き手にとってトラブルになり得ることがら(例:月9が織田裕二のドラマであることを、テレビに疎くまったく知らない相手であること)に気づかずに、前置きなしに言い放ってしまった発話は、聞き手の「え?」「誰?」「誰のドラマ?」などの修復の開始を受けてしまう可能性がある。そして、このよ



うな事態に陥らないためにも、相手がドラマをよく見るタイプの人か、さまざまな前置き（「ドラマってよく見る?」「月9っていつもチェックしてる?」）を使って回避する必要がある。

聞き手にとって、相手の発話の理解困難さを「え?」「ちょっと待って」「それってどういう意味?」などと相手に直接問いかけるのは、コミュニケーション上負荷が高い。スムーズに会話を進める人間は、トラブルになり得ることは事前に回避し、自分が思い出せなければ会話の流れをせき止めることを厭わず、自分から相手に問いかける（例:「あの一、あれなんだっけ。今期の月9のフジテレビのドラマ……」）。以上のようにSJS1977は、自己修復のほうが他者修復よりも相互行為上優先されることを指摘した。ここには、自分と相手との情報の一致度を確認し合い、相手と紡ぎ出す会話の基本的な構造、そして他者を思いやる社会的な秩序が垣間見える。

さて、情報処理学会のみなさま、現在のロボットやエージェントにはこういった相手を思いやる会話の紡ぎ方ができるだろうか？ 人工物が相手の情報

量を認識するだけでなく、この文脈でどの発話が繰り出されるべきか、自分と相手が紡ぎ出す会話が秩序あるものになるためには何が優先されるべきかなどを認識できる機構が必要になってくるのかもしれない。

参考文献

- 1) [SSJ1974] Sacks, H., Schegloff, E. A. and Jefferson, G. : A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation, *Language*, 50(4), pp.696-735 (1974), (西阪 仰 訳, S. サフト 翻訳協力: 会話分析基本論集 順番交替と修復の組織 世界思想社 (2010))
- 2) [SJS1977] Schegloff, E. A., Jefferson, G. and Sacks, H. : The Preference for Self-Correction in the Organization of Repair in Conversation, *Language*, 53(2), pp.361-382 (1977), (西阪 仰 訳, S. サフト 翻訳協力: 会話分析基本論集 順番交替と修復の組織 世界思想社 (2010))

(2018年10月27日受付)

坊農真弓 (正会員) bono@nii.ac.jp

2005年神戸大学大学院総合人間科学研究科にて博士号(学術)取得。その後、ATRメディア情報科学研究所研究員、京都大学大学院情報学研究科研究員、日本学術振興会特別研究員(PD)、UCLAやテキサス大学オースティン校にて客員研究員、国立情報学研究所コンテンツ科学研究系助教を経て、2014年から同准教授。2015年科学技術分野の文部科学大臣表彰若手科学者賞。2016年マックスプランク心理言語学研究所客員准教授。人と人のインタラクションや手話相互行為分析の研究に従事。プライベートではもっばら育児に奮闘中。

